

平成 29 年度「食と農のミライ」作文コンテスト
＜社会人の部＞
最優秀賞

「アニマドーレ」がつくる未来の食農教育のカタチ

実家は農家だった。「だった」のだ。2階の部屋から見える水田。私の幼馴染が買い取った。農家の長男として生まれ、一度は真剣に農家になることを考えたものの、長年の夢だった高校教員の道を選んだ。母は喜んでくれたが、父の心境まではわからなかった。実家は後継ぎを失い、2016年離農した。教員採用試験では「なぜ北海道の教員になりたいのか」という面接官の質問に「北海道の食や農業を通じて子供たちの生きる力を育みたい」と述べた。しかし赴任先は道内有数の進学校で、田舎とは程遠い大都市札幌だった。生徒たちの進学希望先はやれ工学部だ、理学部だ、医学部だと、誰1人として「農学部」を第1希望にする生徒は見られなかった。危機感を感じた。北海道の優秀な学生が、誰一人として北海道の食や農業について学ぼうと思えない環境や教育について何とかしたいと心から思うようになった。

現在、広く行われている農業体験はあまり機能しているとは言えない。将来の進路に直結する時期である高校では農業体験は皆無に等しく、小中学校での実施がほとんどだ。学校は「おまかせします」とだけ伝え、農業体験のプログラムは農家に任される。繁忙期に土に触れたことのないような子供たちが集団で農家を訪れる。農家は簡単な指示を子供たちに伝え、わけもわからぬまま子供たちは好き勝手に畑を踏み荒らす。農家は体験人数の多さに加え、自分自身も仕事をしなければいけない状況で「2度と受け入れなどするものか」と思い、子供たちは「楽しかった」と農家の苦労や食の大切さを知ることなく帰宅していく。農業体験の学びはただの思い出となり、親とスーパーに行って1円でも安い野菜を一緒に探す。そんな消費を続けることが日本の農業を疲弊させてしまう。

「食」は私たちにとっても最も身近で、「生きる」ことそのものである。しかし、私たちは生きるためだけに食べるのではない。食べることが喜びとなり、その喜びに感謝し、この料理や食材を作ってくれた人たちを想う。そんな子供たちを育てることが、私の使命だと思った。少子高齢化が加速する中、農家の数が増えることはないだろう。しかし食や農業に関心をもって、あらゆるフィールドから北海道のサポーターを増やすことはできる。そのために「アニマドーレ」という食農体験プログラムを作ることにした。

アニマドーレとはイタリア語の「アニマトーレ」が語源である。イタリアにはアニマトーレという生産者と生活者をつなぐスペシャリストがいる。各農園にはアニマトーレが中心となり、農園独自の食育プログラムを作り、地域の人たちを巻き込んで食や農業について学ぶ体験プログラムを実践している。このアニマトーレの活躍があり、人々は地元の食材を愛し、感謝の気持ちを持って消費をしていく。農家はそれゆえにいつでも安定した経営ができ、イタリアの自然豊かな大地を守る「守り人」としての役割も果たしていく。「アニマトーレのような人材を北海道で生み出したい！」北海道で活躍するアニマトーレ、北海道の「道」と実行する意味の「DO」をかけて「Animadore (アニマドーレ)」を育てるプログラムを2015年より始めた。

大切な視点は、食や農業への「関わり方」である。将来子供たちがどのような場所において、どのような職に就いても、積極的に地域食材を愛し、地元農家へと関われる「道」を示すプログラムを作ろうと思った。そこで通常の農業体験を軸に、農業体験を実施した農家を支援するための様々なコースを設けた。農家の特産物を使った「商品開発コース」、農業や食の関心を高める「広報PRコース」、収穫した野菜を店頭販売する「販売コース」、農家と寝食をともにする一泊二日の「ファームインコース」を作り、それぞれのコースには学校外から食農教育に関心の高いスペシャリストをコースチーフとして招いた。

商品開発では2年目は地元の醤油味噌会社と連携をしてオリジナルドレッシングの開発。3年目は管理栄養士を目指す大学生と連携をし、農家で収穫した食材をベースに考案したお弁当を商品化し、店頭販売した。販売コースではプロの販売スタッフより接客マナーを

学んだ。自分たちが収穫した野菜を手を持ち、農家の思いや野菜の美味しさを語りながら販売した。広報 PR はデザイナーや地域の広報誌と連携をし、農家への取材からプロモーションビデオの作成、フリーペーパーの原稿作成を行った。プロの歌手に依頼をして、アニマドレーの歌も作った。プログラムに参加した生徒たちは将来どのように食や農業に関わるべきか、またその重要性をどう発信しなければいけないかを具体的に考えられるようになった。

現在は授業の一環として、年35時間実施しており、他校と連携をしてアニマドレーの活動はその規模を拡大している。食や農業への関心は決して農業体験だけで高まるものではない。農業への関心を高める入口を「農業」に限定することなく、様々なアプローチで食や農業への関心を高めていく必要がある。一人ひとりの食や農業へ関するどんな思いやアイデアでも、誰もが一緒になって形にしていくシステム、その一端を担うのがアニマドレープロジェクトである。アニマドレーは産学官連携を図りながら、地元農家と一緒にあってプログラム作りをしている。今まで繋がることのなかった人や組織、団体が「食と農」を軸として共に活動をしている。このプログラムの可能性や魅力は少しずつ広まりを見せ、3名から始まったプロジェクトは3年でスタッフは15名を超えるまでとなった。教員以外の大人たちがそれぞれ役割と専門性をもって真剣に子供たちに接し、未来の北海道の食と農業を応援するサポーターを増やしている。いつか北海道の大地に「アニマドレー」が活躍をし、北海道が日本の食料庫としての機能を一層高め、そのノウハウをアニマドレーたちが全国に発信してくれることを夢見ている。

アニマドレー HP : <http://animadore.net/>